平成 28 年 9 月 29 日

西洋古典資料保存実務研修に参加して

国立国会図書館　収集書誌部　資料保存課
洋装本保存係　西川　明日菜

１．はじめに

平成 28 年 5 月 30 日から 6 月 17 日までの 15 日間（土日を除く）、一橋大学社会科学古典資料センター（以下、「センター」という。）が実施する西洋古典資料保存実務研修に参加した。

現在、筆者は国立国会図書館（以下、「NDL」という。）収集書誌部資料保存課洋装本保存係に所属している。当係は経年や利用によって劣化・破損した紙資料の中でも洋装本の保存修復措置や再製本を主たる業務としており、筆者も 2 年に渡り一般書籍の補修作業に従事してきた。しかし、洋古書の取り扱いに関しては経験が浅く、また外部の専門機関ではどのような技術で処置が行われているのかについて、かねてより強い関心があった。本研修に参加することで、センターで行われている西洋古典資料の保存修復作業や、それに関わる実務全般の OJT を長期に渡り経験し、西洋古典資料の取り扱いについて集中的に学べる貴重な機会を得ることができ、製本構造や補修方法をはじめとする基礎的な知識・技術の修得、特に劣化した革装本への具体的な対処法を学ぶことができるため、参加を希望した。

受講した主な項目としては、資料の劣化調査、クリーニング、破れたページの修理、保革作業、保存容器の作成などが挙げられる。いずれも受講者の理解度に配慮したわかりやすく実践的な内容となっており、また、NDL で行っている保存修復の技術との比較検討を行う良いきっかけにもなった。さらに、劣化調査では実際にセンター所蔵の「貴重書」を対象に実習を行い、多種多様な形態・素材の資料に触れながら学べたことは筆者にとって非常に有意義な体験であった。

なお、本来の実習期間は 3 か月から 6 か月間の規定だが、この度は短期間の参加となったため、カリキュラムの一部分のみを受講している。以下、研修の概要を述べる。

２．研修概要

2.1　古典センター施設見学

‣ センター概要

センターは、一橋大学の貴重書図書館として、1978 年に一橋大学附属図書館から独立した専門施設である。西洋古典資料の内、1850 年以前の刊行物及びコレクション群を中心に約 8 万冊の蔵書を有しており、それらの利用提供及び保存管理が業務の主軸である。コ

レクションの一つであるカール・メンガー文庫のマイクロ化事業に際し状態調査と修復処置を行う必要が生じたことを契機に、1995 年、センター内での保存修復事業の拠点として貴重書保存修復工房が設立され、順次資料調査と保存作業が進められてきた。工房には専門スタッフ 4 名が所属しており、所蔵資料の低温殺虫処理、劣化調査、クリーニング、修理、保存容器作製までの一連の作業を連携して行っている。また、附属図書館職員への補修研修や各研究室からの補修相談の対応等、学内における資料保存の拠点としての役割も担っている。

- **書庫について**

1978 年に竣工した 3 階建ての当施設は、2 階と 3 階が書庫になっている。書庫内部は一日の中での短期的な温湿度の変動がほとんどなく、年間を通じて緩やかな変化は見られるものの、安定した環境が保たれていた。外壁の断熱性が高いことに加え、室内壁面に設置した調湿ボードが効果的に機能しているのが大きな理由であり、夏期以外は空調機を使用していないとのことだった。

また、センター設立以来カビによる被害は確認されておらず、このことからも書庫内の環境の良さが伺える。先述の通り急激な温湿度変化が無いことも要因の一つだが、スタッフによる定期観察や、月に一度実施している床や書架の清掃も大いに役立っていると考えられる。また、出入りする人数が限られていること、書庫が比較的小規模であり目が届きやすいことなども、結果として環境管理のしやすさにつながっているとのことだった。

2.2　低温殺虫処理法

2007 年に書庫内で虫損被害が確認されたことをきっかけに所蔵資料の低温殺虫処理を開始、現在所蔵資料の半数程度まで継続的に処置が進められている。手順としては、資料を一点ずつ薄手の中性紙で包みビニール袋に封入した後、マイナス 40℃に設定した大型冷凍庫内で一週間保管し、取り出した直後は包んだまま丸一日ほど置くことでゆるやかに常温に戻し、資料表面の結露を防ぐというものである。熱に弱い革材が使用されている資料についても、低温下においては変形・変色等の劣化が生じることもなく、また生きた幼虫・成虫にも一定の効果が認められているという。NDL で採用している殺虫処理法は燻蒸や低酸素濃度殺虫処理が主な方法であるため、一連の作業を体験することは非常に有意義であった。

2.3　資料の劣化調査及びクリーニング

センターでは個々の資料の現時点での製本構造や劣化状態を記録するために、全資料の状態調査を行っている。所蔵する洋古書の特性に沿うよう作成されたカルテをもとに一点ずつ詳細を記録し、修理や保存容器等の処置が必要と判断したものについてはその処置内容も記載している。また、カルテの内容を PC 入力しデータベース化しておくことで、いつでも容易に検索・参照が可能となっている。

本研修でも、実際の資料約 60 点について劣化調査を行い、洋式製本の主たる製本構造（綴じつけ製本やリンプ製本、仮綴じ本等）とそれに伴う劣化損傷の実例を学んだ。同時に、どこまでを損傷と見なし、どこまで処置すべきかの判断基準を体感することができたのは大きな収穫である。

状態調査に合わせ、マルチファイバークロス、刷毛を使用したクリーニング作業も体験した。NDL でもクリーニングは行っているが、劣化した革装本等は簡単なクリーニングでも気を遣う点が多く、扱いの難しさを実感した。なお、今回調査を行った資料はいずれもおおむね状態が良く、簡単な修理と保存容器で対応することとなった。

2.4　修理（ページ修理・保革作業）

まず、センターが所蔵する資料は全て「原装維持」が基本となる。文字情報だけでなく、本文紙や装丁、綴じの構造といった媒体自体が有する情報も含めて保存することを前提としており、修理の際もこの方針に準じて判断・処置が行われている。したがって、製本構造に手を入れなければならないレベルの破損等に対しては修理を行わず保存容器で対応し、本文紙の破れなどといった小さな範囲でのみ、必要最小限の補修を行っているとのことだった。具体的な作業としては、前述のクリーニングに加え、破れた本文紙の修理、劣化した革材の保革作業がそれにあたる。

- **ページ修理**

まず、ページの破れの補修方法について実習を行った。長期保存に適う安全性かつ可逆性のあるものとして楮 100%の和紙とでんぷん糊（正麩糊）を使用し破れ目に薄く溶いた糊で和紙を貼るというもので、基本的には NDL と同様の方法で補修が行われていた。

- **保革作業**

劣化が進み表面が粉状化した革への処置として、数種の薬剤を塗布し表面を保護する方法を体験した。使用したのはヒドロキシプロピルセルロース（HPC）をエタノールで希釈した溶液、保革油、アクリルポリマーの 3 種類ある。HPC は革の表面に浅く浸透し、劣化により粉状化した表面を安定させる効果がある。また、劣化した革は水分に弱いが、アルコールで希釈できる HPC は余計な水分を資料に与えることなく作業可能という利点もある。HPC 溶液で表面の目留めを行い乾燥させた後、保革油を布で塗布する【写真 1】。再び十分に乾燥させてから乾拭きし、最後に表面のコーティング材としてアクリルポリマーを塗布した。

写真 1　(左)保革油あり　(右)保革油なし

保革油の油分を表皮に浸透させることで革の柔軟性を回復させ、また、最上層のアクリルポリマーは保革油のべたつきや酸化を防ぐ役割を持っている。

ただし、革の劣化状態によっては保革油を塗ることで変色が生じる場合や、さらなる劣化が進行する可能性があるため、現在センターでは HPC 溶液の塗布までの処置のみに留めているとのことだった。また HPC についても、場合によっては変色等の危険性があるとのことで、処置が可能かどうかの見極めには多くの経験が必要と感じた。

2.5　保存容器及び書見台の作製

センターでは個々の資料の形態・状態に合わせた各種の保存容器を作製しており、サンプルを用いて実習を行った。資料と接する材料は全て中性素材が使用されており、保存箱型・カイルラッパー型・フォルダー型の 3 タイプが主要という点は NDL と同様だが、個々の形状や事例により対応できるよう、複数の補助具も活用しているところに特色がある。例えば表装材の革が劣化したものについては、保存箱の内側で摩耗することを考慮して中性紙のジャケットをつけてから保存箱に入れる、また、本文紙の自重によって見返し紙に負荷がかかっているものには補助具で足をつけ支えるなど【写真 2】、一点ごとに手厚い処置が施されていた。利用者が閲覧する際には容器からの出し入れに若干の手間と破損が懸念されるものの、利用数も少なく、また職員の目が行き届く環境であるからこそできる選択とのことだった。

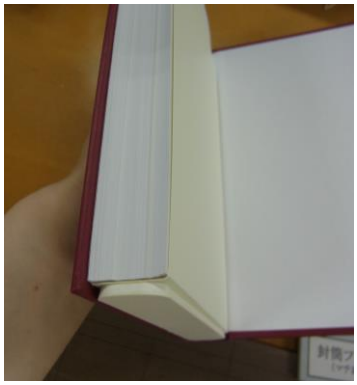

写真 2　補助具の一例

実習では紙ジャケット、保存箱の他、閲覧時の補助具となる書見台も作成した。書見台も保存箱と同じく中性素材を使用しており、洋古書の利用の際には必ず使用しているとのことだった。

3.　おわりに

この度の研修を通して、西洋古典資料に関し多くの知見を得ることができた。洋式製本の基礎知識や製本構造、それに伴う劣化の傾向と事例をはじめ、取り扱い方や補修方法等の実務全般についてマンツーマンの丁寧な指導を受けられたことは、他では得難い貴重な経験であった。16、17 世紀の貴重な実物に、直接触れながら学べたことも大きい。

実習項目の中でも、特に劣化調査の手法は大いに役立つ内容であった。効率的に調査を進めるためには、まず調査の目的を明確に打ち立て、それに従って項目を絞り込む必要がある。センターでは、現在の資料の構造や状態に関わる基本情報を記録することを目的とし、また PC 上でのデータベース化を前提としたカルテが作られていた。ただ記録するのではなく、目的を据え、その目的に見合う情報を得られるような項目を組み合わせた効果的なカルテを作ることが状態調査の基本であると実感した。

また、革や羊皮紙を使用した資料についても非常に勉強になった。革を扱った経験の無い身としては、動物ごとの特徴や性質、傷み方といった革の基礎知識はもちろんのこと、劣化の度合いに応じた処置の判断を体感的に学べたことは大きい。

様々な材質・形態・年代の、かつ膨大な数の資料を扱う NDL と比べると、センターの蔵書構成は「特定の時代」の「洋古書」という小規模かつ限定的なものではある。しかし、だからこそ保存修復の方針が立てやすく、管理の目も行き届きやすいという利点がある。事実、前項で述べた一連の実務作業は「洋古書の保存」という明確な指針に沿って作業工程や処置の流れが簡潔にライン化されており、少人数ながらも効率的に数がこなされていた。NDL においても、コレクション資料等、まとまった単位で保存方針を考える際のモデルケースとして参考になる部分は多いように思う。また、作業にあたるスタッフ全員が同じように判断・処置ができるよう、積極的に話し合いや擦り合わせを行っている姿勢に、品質管理の水準の高さを感じた。今後は本研修で得た知識や経験を活かし、NDL が有する洋古書の保存に積極的に取り組んでいきたい。

4. 謝辞

本研修の実施にあたり、ご指導を賜りました一橋大学社会科学古典資料センターの皆様、また各種手続等でご対応いただいた一橋大学附属図書館の皆様に、心より感謝申し上げます。